

◎シ恰ニ  
二軍揚陸ヲ掩護  
三艦隊カ務  
セリト會シ

第十三章 第三回閉塞後ニ於ケル艦隊

ノ動作并ニ封鎖宣言

第一節 艦艇ノ遭難

第三回閉塞ノ成否ニ拘ラヌ一面ニハ極力旅順  
 口ヲ封鎖スルト共ニ一面ニハ陸軍ト協同シ以テ  
 遼東方面ニ於ケル海陸ノ敵ヲ撃滅セントスルハ夙  
 ニ我カ海軍ノ策定セル所ナリ是ヲ以テ閉塞ノ決  
 行セラル、ヤ東郷司令長官ハ五月四日第一艦隊  
 ヲ率井テ一旦光祿島ニ赴キ第二軍上陸ノ為メ  
 端舟ヲ送り五日再旅順口沖ニ到リ閉塞ノ成果ヲ  
 視察シ六日塩大澳ニ入港シ艦隊集合地港務  
 部長海軍少將三浦功ヨリ裏茂山列島錨地ノ據海  
 結了以外ノ報告アリタルヲ以テ九日艦隊根據地

十三回閉塞後

三九八

0506

此ノ如ク戦局益々發展シタリシニ不幸ニシテ

同備地ニ移シ第一艦隊ヲシテ旅順口ノ直接封

鎖ニ從事セシメ第三艦隊ヲシテ引續キ陸軍ノ揚

兵ヲ掩護シ且其ノ前進ニ策應セシム

十八號艇ト宮古ト大密口ト

械水雷ニ觸ル吉野ハ春日ト衝突シ初瀬ハ島モ亦

機械水雷ニ罹リ龍田ハ坐礁シ大島ハ赤城ト衝突

シ暎モ亦機械水雷ニ觸レ我カ艦隊ハ数日ニシテ

實ニ数隻ノ堅艦ヲ失ヘ

初ノ第二陣ノ上陸漸次進行スルヤ片岡第三艦隊

司令官ハ東郷司令長官ノ訓令ヲ受

大密口ノ掃海ヲ開始セシ

雷俄ニ爆發シ第二十一艇隊ノ第四十

害ヲ蒙リ浸水甚シク約七分

0507  
0508

大密口ノ掃海ヲ開始セシ  
約前九度一分身經約百二十一度五十五分ニ位ス

此の如く戦局益々發展シタリト不幸ニシテ

同鍋地ニ移シ第一艦隊ヲシテ旅順口ノ直接封鎖ニ從事セシメ第三艦隊ヲシテ引續キ陸軍ノ揚兵ヲ掩護シ且其ノ前進ニ策應セシム

於ケル掃海掩護中機械水雷ニ罹リ龍田ハ坐礁シ大島ハ赤城ト衝突シ暁モ亦機械水雷ニ觸レ我カ艦隊ハ数日ニシテ實ニ数隻ノ堅艦ヲ失ヘ

初ノ第二陣ノ上陸漸次進行スルマ片岡第三艦隊司令官長官ハ東郷司令官長官ノ訓令ニ従ヒ

大津中ノ掃海艦隊ハ二十二日約七時頃ニ沈没シ

甯俄途爆發シ隊中二十一艇隊ノ隊中十八號艇ハ損害ヲ蒙リ浸水甚シク約七分時ニテ沈没シ乗組

0507  
0508

海軍少尉蔭山英榮及下士卒五名戦死、上等兵曹  
成松壽太郎

ビ  
角  
緯約三十九度二分東經約百三十一度五十二分半、位  
島

撃攘シテ掃海

侍、其ノ小菜

セル沈置水

入レ二十三合

出羽第一艦隊

士、春日ヲ率

一小隊トシテ

早曉旅順口外

進、港口ノ南北線、中、游弋スルヲ見薄

暮、及ヒ又小蒸氣船一隻ノ他舟ヲ曳キテ饅頭山

十七日午後四時

四〇〇

0509  
0510  
0511

五名戦死 上等兵曹

0509  
0510  
0511

南方に突出スル一角ニシテ島北緯約三十七度四十七分半東経約百三十一度三十分半ニシテ根領口ノ東方約十六海里ニ位ニ高サ三百八十呎  
度五十二分半ニ位ス 西側ハ陰崖ニシテ島頂ヨリ直下ニ東側ハ斜坡ヲ以テ沿岸陡峻ニシテ其南東方約三百十米突高サ四百一十呎アリ

舟ヲ遊弋スルヲ見薄  
他舟ヲ曳キテ饅頭山

四〇〇  
毎  
頁

海軍少尉蔭山英榮及下士卒五名戰死、上等兵曹

入公壽太郎翌七及下士卒九名負傷、十四日

近に投錨セル宮古ハ陸上ノ敵兵ヲ

撃攘シテ掃海隊ヲ掩護シ既ニ大部ノ掃海

時、其ノ小蒸氣船ヲ引揚ケトスルノ際忽チ残存

セル沈置水雷ト觸レ左舷機関室大破シテ潮水侵

入シ二十三分時ヲ經テ亦遂ニ沈没セシ戦死者名ヲ述ベリ

出羽第一艦隊司令官ハ第三戰隊(津間、高砂)及ヒ富

士春日ヲ率井テ裏長山列島ヲ發シ千歳吉野ヲ

一小隊トシ春日ハ雲富士ヲ第一小隊トシ十三日

早曉旅順口外ニ到リテ敵驅逐艦六隻を鐵中十

進港口ノ南北線中ヲ游弋スルヲ見薄

暮、及ヒ又小蒸氣船一隻ノ他舟ヲ曳キテ饅頭山

海軍少尉蔭山英榮及下士卒五名戰死、上等兵曹

十七日午後四時

四〇〇

0508  
0510  
0511

下ニ到ルヲ認メタリシモ曉來ノ濛氣ニ遮ラレ港  
 内ヲ偵察スル能ハス翌日依然トシテ霧レス僅  
 ニ饅頭山方面ニ敵驅逐艦四隻ノ游弋スルヲ望見  
 北東ニ向ヒ航進中深夜遽然濃霧ニ遭遇セリ  
 時同戦隊ノ單縱陣ヲ作り旗艦千歳ヲ先頭トシ  
 吉野春日八雲富士之ニ續航セリ而シテ三番艦春  
 日ハ前續艦ノ跡ヲ失ハシコトヲ慮リテ稍速力  
 ヲ増シタルモ乍ニシテ其ノ如ク所ヲ知ラズ翌日  
 午前一時三四十分ノ交ニ至リ右舷前方ニ掃探  
 海燈光ノ如キモノヲ認メ吉野ノ前進シツ、アル  
 モノト爲シ之ニ續航センカ爲メ右轉セントスル  
 ノ際又赤色舷燈ヲ同舷艦首ニ發見シ其ノ相距

0512

僅三

ル呼應ノ間ニ在リ同艦長ハ急ニ全速後退ヲ令セ

シモ遂ニ艦首ヲ以テ吉野ニ衝突シ當時吉野

ハ恰モ回轉中ニ在リ其ノ艦員ハ危機ヲ見テ大聲

春日ニ向ヒ注意ヲ喚起セシモ及ハズ咄嗟ノ間ニ

衝突シ吉野ノ燈火全滅スルト同時ニ海水ハ水線

下ニ穿孔ヲ入り奔入リ艦體忽チ右舷ニ傾キ到底救

フヘカウサルニ至レリ是ニ於テ艦長海軍大佐佐

伯間ハ艦員ヲ集メテ萬歳ヲ三唱セシメ先ツ聖影

ヲ端舟ニ奉移シ續テ総

覆没シ概位北緯三十八度七分  
東經百三十三度三十分諸舟皆之ヲ為メニ廢没セラ

レ僅ニ無事ナリシモノ

ト本ノ此端舟ハ後々春日ノ  
為ニ救助セラレ

ヤ佐伯艦長ハ尚前艦

0513  
0514



僅三

ル呼應ノ間ニ在リ同艦長ハ急ニ全速後退ヲ令セ  
 シモ遂ニ艦首ヲ以テ吉野ニ乘テ龍舷ヲ衝キ當時吉野  
 ハ恰モ回轉中ニ在リ其ノ總員ハ危機ヲ見テ大聲  
 春日ニ向ヒ注意ヲ喚起セシモ及ハス咄嗟ノ間ニ  
 衝突シ吉野ノ燈火全滅スルト同時ニ海水ハ水線  
 下ニ穿孔ヨリ奔入シ艦體忽チ右舷ニ傾キ到底救  
 フヘカウサルニ至レリ是ニ於テ艦長海軍大佐佐  
 伯間ハ艦員ヲ集メテ萬歳ヲ三唱セシメ先ツ聖影  
 フ端舟ニ奉移シ續キ總員ヲ退去セシメ艦體遂ニ  
 沈没セリ

此ノ端舟ハ後ニ春日ノ艦ノ時ニ覆没セントスル  
 為ニ救助セラル

初ハ聖影ヲ奉載セル一端舟  
 為ニ沈没セリ

ヤ佐伯艦長ハ尚モ橋ニ在リテ諸般ノ指揮ヲ了

0513  
0514

混

廿七八年海軍史

度

四〇三

海

軍

赤松兵市、同竹内兼藏、同黒澤鴻藏、海軍大務、同土竹内三千三、海軍大主計  
 弘願鶴馬、海軍中尉、小林教之助、海軍中務、同土利廣盛、同島村吉次郎、海軍  
 中軍醫、目下亮平、海軍少尉、曾布川新平、同市岡源三、同久継理一、同松嶋正  
 明、海軍少機、関土土井弘、海軍少尉、候補生、小島高孝、同近藤藤吉、同宮城胖  
 同迎為次郎、同村田熊猪、海軍少機、関土候補生、石田流芳、同新貝岩吉、同伊  
 藤卓三、海軍上等兵、曾村尾保太郎、同井上武市、海軍船匠、師藤本光次郎、海

廿七八年海軍史

海軍

軍上等機、関兵曾山田龜、同下元庄馬、  
 同小森孝放、同殿田林太郎、同中川龜一

以之カ應急修理ヲ為セリ

0515

0516

り副長心得海軍少佐廣瀨顯一ト握手シタル後相  
 共ニ艦ト運命ヲ同シシ其ノ他難ニ殉ヒシモノ准  
 士官以上三十名<sup>〇</sup>下士卒二百八十七名<sup>四</sup>備員三名

春日<sup>三</sup>衝突後直ニ機關ヲ停止セシメ既ニ吉野ト

遠<sup>ニ</sup>離カ<sup>リ</sup>四顧暗燿<sup>シ</sup>テ其ノ所在<sup>ヲ</sup>失<sup>ハ</sup>唯漠々<sup>ト</sup>

北<sup>ニ</sup>濃霧<sup>中</sup>ニ我浸水救助ヲ要<sup>ス</sup>トノ無線電信ヲ感

受<sup>セ</sup>シ<sup>ノ</sup>ニ乃チ直ニ端舟ヲ下<sup>シ</sup>テ救助<sup>ニ</sup>從<sup>ハ</sup>シ

ノシモ既ニ沈没後ナリシカ<sup>故</sup>僅ニ吉野機關長心

得海軍機關少監兼常務三等准士官以上六名下士

卒及ヒ傭人九十三名<sup>以上、外軍醫長海軍大軍醫美濃部</sup>ヲ救

助<sup>セ</sup>シ<sup>ノ</sup>ニ春日モ亦其ノ衝角ヲ損<sup>シ</sup>浸水アルヲ

以<sup>テ</sup>之<sup>カ</sup>應急修理ヲ為<sup>セ</sup>リ

混

卜卅

下唐

平野半  
 野原中  
 野原中  
 野原中  
 野原中

0515  
0516

難アリシヲ察知セシヲ  
 下直ニ事無線電  
 三ニテ吉野 核以テ  
 三ヲ尋由セシニ感信ヲ  
 信スルニシテ 各艦ヲシテ  
 互安全ニ 距離ニ割リ  
 以鍋セシメテ 斯クシテ  
 右外ハ 艦外ノ在る  
 救フニ由ナリ 四番艦ハ雲  
 中ニ在リ 五番艦ハ

旗艦千歳ニ在リシ出羽司令官ハ初ノ大霧来襲

キ死ト後續諸艦ヲ見ル能ハサルト至ルヤ先ツ

艦尾速力燈ヲ出シ次ニ舷燈及ヒヤーカ一山速力

燈ヲ出スヘキヲ余レ午前一時三十分豫定ニ由リ

北ニ東ノ新航路ニ向ヒシ漸ク轉針ヲ終リタル

時忽チ吉野ノ方位ニ備リテ非常ニ音響ヲ聞キ

衝突ノ難ヲ知リ二時五十分春日ヨリ吉野

沈ミヤ電報アリシキ奈何

ト能ハス四番艦八雲及ヒ五番艦富士モ亦無線電

信ニ由リ吉野ノ遭難ヲ知ル濃霧鎖

僚艦危急ヲ救フ由ナク十一時三十分後ト至

ル始メテ千歳ト相會スルヲ得タリ是ニ於テ出羽司

令官ハ八雲ヲシテ春日ヲ護衛シテ裏長山列島

廿七八年海軍史

四〇二 第一頁

0517

歸ラシメ自ラ千歳富士ヲ率井テ同一錨地ニ直航  
 セレニ濃霧再ヒ密集シテ復富士ヲ見失ヒ唯汽笛  
 ニ由リテ僅ニ其ノ艦位ヲ知リ遂ニ午後五時三十  
 四分長子島ニ投錨セリ  
 初瀬八島ノ難モ亦實ニ吉野春日日ヨリ同地ニ  
 起リ遭難ニ先々コト一日梨羽第一艦隊司令  
 官ハ初瀬敷島八島笠置及ヒ龍田ヲ率井裏長山列  
 島ヲ發シテ旅順口ノ直接封鎖ニ向ヒ十五日午前  
 十時五十分頃元鐵山ノ南東ニ達セリ偶第六戰隊  
 ノ明石須磨千代田秋津洲第七戰隊ノ宇治第十四  
 艇隊ノ千島及ヒ大島赤城ヨリ成ル一隊平他  
 ノ特別任務ヲ帶ヒタル高砂モ其附近ニ在リシカ  
 俄ニ初瀬ハ沈置水雷ニ觸リ激震艦尾ニ起

0518

行海軍上等筆  
記齋藤電彦

少佐子爵仁禮景一、海軍少佐塚本善五郎、海軍大務尉士山賀八三、海軍中尉  
秋山米吉、海軍中務尉士大石親徳、海軍中軍醫上官繁吉、海軍少尉小林真人、  
回松厚弘、綱、回今井與孝、回松崎忠一、海軍少尉藤田喜代彦、海軍少尉長田中  
佐藤道久、回山下重幸、海軍兵曹長佐藤控蔵、回岡崎喜代彦、海軍少尉長田中  
治三郎、海軍少尉藤田英、回池野龜之助、海軍上等兵菅有川、貞光、回  
助、回田中積、回内山義一、回江良次郎、回原田保太郎、海軍少尉藤田士候、補生  
永原和衛、回和田村太、回橋田英、回池野龜之助、海軍上等兵菅有川、貞光、回  
河内由太郎、海軍上等兵藤田英、回池野龜之助、海軍上等兵菅有川、貞光、回

海軍軍醫中監  
副文之助、海軍

リ、溜々々ル、侵水飛機堂、充、梨羽司令官ハ  
直ニ、後續諸艦ニ、針路ノ變換ヲ命、未々數分  
時ヲ出テスレテ、八島モ亦水雷ニ觸レテ、其ノ右舷  
側ヲ破ラレ、瞬時ニシテ、第一ノ爆發ヲ受テ、  
ルヲ以テ、梨羽司令官ハ直ニ高砂ヲシテ、八島ヲ救

後、忽々

(テリ)

0519  
0520

學士 坂本  
 少將 坂本  
 大佐 坂本  
 中佐 坂本  
 少佐 坂本  
 大尉 坂本  
 中尉 坂本  
 少尉 坂本  
 大士 坂本  
 中士 坂本  
 少士 坂本

リ 溜々タル 浸水艇機座ニ充テ 梨羽司令官ハ  
 直ニ 後續諸艦ニ 針路ノ 變換ヲ 命ジ 未タ 教分  
 時ヲ 出テ スシテ 八島モ 亦水雷ニ 觸レテ 其ノ 右舷  
 側ヲ 破ラレ 瞬時ニ レテ 更ニ 屏エノ 爆發ヲ 受テ  
 ルヲ 以テ 梨羽司令官ハ 直ニ 高砂ヲ シテ 八島ヲ 救  
 助セシメ 笠置ニ 初瀬ノ 戍行ヲ 命ジシニ 午後零時  
 三十三分 初瀬ハ 再ニ 機械水雷ニ 觸レ 轟然タル 爆  
 聲ト 共ニ 黄褐色ノ 火焰 暴騰ケ 後 播折レ 烟炭 倒レ  
 甲板 飛散シ 二分ニ レテ 全ク 沈没シ 副長 海軍中佐  
 有森元吉 准士官以上 三十七名 下士卒 四百四  
 十名 傭員 十五名 難ク 殉セリ 是ニ 於テ 笠置ハ 附  
 近ノ 各艦ト 共ニ 端舟ヲ 下ニ 推テ 收容ニ 從事セシカ 敵  
 驅逐艦 四隻 我カ 難ク 乘レテ 港口ヨリ 戻出シ 午後

使 惣々

（行）

0519  
0520

又行ノ為ノ初瀬ニ持止ニ  
既ニ或モノノ端ヲ面止  
ニレモ其ノカノノ水留ニ  
觸ルルニ及ビ之ヲ切斷シ

二時頃ニハ更ニ増加シテ十一隻トナリ葛然トシ  
テ急進シ来ト此ノ時梨羽司令官初瀬艦長海軍  
大佐中尾雄准士官以上十五名下士卒及ヒ傭員百  
九十九名ノ既ニ龍田ニ收容セラレ笠置ハ初瀬主  
計長海軍主計少監藤野利吉外准士官以上五名下  
士卒百十八名ヲ收容シ八島ヲ救ハントシテ  
先ツ小蒸氣船ヲ派遣亦同方面ニ進ムノ際ナリシ  
カ敵驅逐艦ノ襲来スルヲ見ルガキ轉シテ之  
向ヒ漸次遠距離ヨリ發砲ヲ開始セシ敵ハ我  
撃ヲ加ケル毎ニ轉針ト後方ニ在ル小蒸氣船ニ向  
ハントシ次ニ同二時三十分ニ笠置ヲ距ル六千  
五百米突ニ連シ頻ニ發砲セシカ次第ニ退却シテ  
一旦煙霧ノ裡ニ没シ去リ暫ニシテ復現ハレ再ヒ

0521



我ニ向ク時ニ八島ノ傾斜益甚ムシカリシモ高砂  
 平ノ敷島等其ノ附近ニ在リシヲ以テ笠置ハ直  
 ニ敵ヲ迎ヘ龍田及ヒ第六戦隊ト共ニ力ヲ合セテ  
 之ヲ砲撃ス既ニレテ敵驅逐艦ハ更ニ増加シテ十  
 六隻トナリ初瀬ノ沈没位置ニ急進シ諸端舟ヲ掩  
 撃シ我艦隊ノ近ツクヲ見遠ク港口ニ遁走セ  
 リ仍ラ笠置ハ戦ヲ止メ須磨龍田ト共ニ八島ノ乗  
 員ヲ收容シ歸途ニ就ケリ

八島艦長海軍大佐坂本一ハ遭難後直ニ艦員ヲ督  
 勵シ排水ニ努メシモ浸水劇甚ニレテ到底沈没リ  
 免シ難キヲ知り先ツ乗員ノ一部ヲ高砂ニ移シ午  
 後零時二十五分ヨリ徐航シテ遇岩方面ニ向ヒシ  
 カ艦體ノ傾斜刻一刻ヨリ甚シク同五時三十五分

廿七八年海戦也

四〇八 毎 軍

0522

二八遂、十六度三十分ニ及リ是於同四十  
 一分遇岩ノ東北東約五海里ノ處ニ投錨シ此ノ時  
 聖影ハ既ニ須磨ニ奉移シタルヲ以テ乘員ヲ後甲  
 板ニ整列セシメ、米<sup>君</sup>禮式ヲ吹奏シテ軍艦旗ヲ撤  
 シ萬歳ヲ三唱シタル後總員退去ヤ<sup>同艦、終其投錨位置ニ沈没</sup>  
 梨羽司令官ハ龍田ニ移乘シ同艦ハ午後六時二十  
 五分裏長山列島ニ向ヒシニ途中濃霧ニ遭ヒ九時  
 十八分頃光禄島ノ南東岸ニ擱坐セリ  
 東郷第三艦隊司令官ハ敵陸軍ノ南下ヲ牽制シテ  
 以テ第二軍ニ策應セシ<sup>カガ</sup>欲<sup>カガ</sup>五月十五日午前五  
 時第六戦隊ヲ率井テ塩大澳ヲ發シタリシカ十一  
 時頃初瀬八島ノ遭難ヲ電知シトルヲ以テ明石須  
 磨千代田秋津洲ヲ率井テ急航之ニ赴キ敵駆逐艦

240 0523

ヲ擊攘シ翌日午前大島赤城宇能ヲ合シテ共ニ塔

山塔山北緯約四度十九分東經約百三十二度八分營口南方約五海里位ニ高サ四百三十一尺ニテ頂上ニ顯著ナル一塔アリ 夜ニ入り

テ農務ニ會シタリ大島赤城 鐵船作直掛鉤セントス

ルノ際木島赤城ト衝突シ十七日午前三時三十分

分終ニ右舷ニ傾キテ沈没シ總員赤城ニ收容セリ

ル天明後東郷司令官大島赤城 鐵船作直掛鉤

艦ヲシテ鐵島鐵島北緯三十八度五十七分東經約百三十二度五十分半ニテ關東半島北西方約六海里ニ位ニ高サ七百五十

ノ諸艦ヲ率カテ豫定航路ヲ取り金州沿岸ヲ砲撃手

シ午後五時三十分諸艦ヲ收メテ歸途ニ就ケリ編隊

驅逐艦曉ハ封鎖勤務ニ從事中十七日午後六時二

十分分老鐵山ノ南方ニ煤烟ヲ望ミ之ヲ追躡セシ

ニ乍キレシ艦影ヲ逸レタリカ故為來ヨリ哨區ニ

軍ト共同作戰ノ部ニ詳ナリ

廿七八年海戰史

海軍

0524  
0525  
0526

共ニ塔	ニ入リ	ントス	時三十八	容セラ	ケリ	六時二	躡セシ	哨區
					編陸			

0524  
0525  
0526

島北西方約六海里ニ位ニ高リ七百五十呎島  
ニ屬スルモ外觀上ヨリ推察スルカ如シ

金州湾ハ北緯約三十九度六分東經約百二十度五分ニ位ニ南東方ハ關東半島ノ地頸ヲ隔テ大連湾トシ  
金州灣ノ北緯約三十九度六分東經約百二十度五分ニ位ニ南東方ハ關東半島ノ地頸ヲ隔テ大連湾トシ  
金州灣ノ北緯約三十九度六分東經約百二十度五分ニ位ニ南東方ハ關東半島ノ地頸ヲ隔テ大連湾トシ  
金州灣ノ北緯約三十九度六分東經約百二十度五分ニ位ニ南東方ハ關東半島ノ地頸ヲ隔テ大連湾トシ  
金州灣ノ北緯約三十九度六分東經約百二十度五分ニ位ニ南東方ハ關東半島ノ地頸ヲ隔テ大連湾トシ  
金州灣ノ北緯約三十九度六分東經約百二十度五分ニ位ニ南東方ハ關東半島ノ地頸ヲ隔テ大連湾トシ  
金州灣ノ北緯約三十九度六分東經約百二十度五分ニ位ニ南東方ハ關東半島ノ地頸ヲ隔テ大連湾トシ  
金州灣ノ北緯約三十九度六分東經約百二十度五分ニ位ニ南東方ハ關東半島ノ地頸ヲ隔テ大連湾トシ  
金州灣ノ北緯約三十九度六分東經約百二十度五分ニ位ニ南東方ハ關東半島ノ地頸ヲ隔テ大連湾トシ  
金州灣ノ北緯約三十九度六分東經約百二十度五分ニ位ニ南東方ハ關東半島ノ地頸ヲ隔テ大連湾トシ

濃霧ニ會シタルヲ以テ諸艦便宜投錨セントス

ヲ擊攘シ翌日午前大島赤城宇治ト合シテ共ニ塔

面ヲ砲撃シ午後金州灣ニ向ヒ夜ニ入り

濃霧ニ會シタルヲ以テ諸艦便宜投錨セントス

ル際木島赤城ト衝突シ十七日午前三時三十分

分終ニ右舷ニ傾キテ沈没シ總員赤城ニ収容セラ

ル天明後東郷司令官ニ更ニ之ヲ秋津洲ニ移シ同

ノ諸艦ヲ率テ豫定航路ヲ取り金州沿岸ヲ砲撃手

シ午後五時三十分諸艦ヲ收メテ歸途ニ就ケリ

驅逐艦曉ハ封鎖勤務ニ從事中十七日午後六時二

十分分老鐵山ノ南方ニ煤烟ヲ望ミ之ヲ追躡セル

ニ乍カキレト艦影ヲ逸レタルカ故ヲ為來ヨリ哨區

艦影ヲ逸レタルカ故ヲ為來ヨリ哨區

艦影ヲ逸レタルカ故ヲ為來ヨリ哨區

廿七八日海戦記

四一〇 海軍

0524  
0525  
0526

十一月三日海軍

四二

在

向ノ、途次十時二十三分老鐵山頂解南東微南約  
八海里ノ地点ニ於テ機械水雷ニ罹解瞬時ニシテ

死七後七察七監七ハ直ニ之七カ七力七

海軍大尉尾中掃雄、海軍大尉関士井上盛記、海軍大尉警  
小池梅司、海軍大尉主計金子宗雨、海軍大尉関兵曹長秋山安

郎太  
下奉十四名、遂ニ其難殉ス

六准也 此防也

0527  
0528

向ノ、途次十時二十三分老鐵山頂（嶺）南東微南約  
 八海里ノ地点ニ於テ機械水雷ニ罹（觸）瞬時ニシテ  
 沈没（シ）僚艦ハ直ニ之カ救助ニ努（力）下士卒三十六  
 名ヲ收容セシモ艦長海軍大尉末次直次郎及ヒ准  
 士官以上（六）名下士卒十六名ハ遂ニ其ノ難ニ殉セ  
 リ  
 十八日第四第五驅逐隊ハ第一第二十六艇隊ト共ニ  
 命ヲ受ケテ哨戒任務ニ就キ午後五時頃（島）  
 達セシコノ一ウ井ク及ヒ驅逐艦二隻鮮生角附近  
 ニ現レ突進シ来リテ砲撃セリ我々諸隊ハ敵ヲ誘  
 出シ機ヲ見テ之ヲ掩撃セシトセシニ敵ハ遂ニ港  
 口ニ退（却）リ蔚三回閉塞以來敵ハ大艦ノ港外ニ  
 出現セシハ連日ノ一ウ井クノ出動ヲ以テ初（始）メト

十一月八日海軍省

四二

海

0527  
0528

ス是ニ於テ聯合艦隊司令長官ハ敵ハ既ニ閉塞セ  
 ル港口ニ通路ヲ開キタルヲ察知シ益敵ニ對スル  
 監視ヲ嚴ニスルト同時ニ敵ノ我カ不幸ニ乘シテ  
 或ハ攻勢ヲ取ラシコトヲ慮リ更ニ裏長山列島ヲ  
 警戒セリ

備考

(一) マカロフ中將戦死ノ後露國黑海々軍司令

長官海軍中將ニコライイルラリオノフ并

ツチ、スクルイドロフハ四月十六日

露艦長  
月三日 太

平洋艦隊司令長官ニ轉補セラレ

露國政府ハ婆羅的艦隊ヲ遠東ニ行セシムルノ策ヲ

決シ同三十日、並リ之ヲ太平洋隊ニ艦隊

ト稱シ現ニ東洋ニ在ルモノヲ太平洋隊一

艦隊ト稱スル者ヲ發表シ五月二日海軍中



將ビヨートル、アレキセイウ井ッテ、ベゾグラ  
 ーゾフヲ第一艦隊司令長官ニ補シ海軍少  
 將ジノール<sup>ウ</sup>井ッテ、パトロウ井ッテ、ロジエスト  
 ウエンスキーヲ第二艦隊司令長官ニ補シ  
 スクルイドロフ中將ヲ以テ第三艦隊ニ任  
 セタル聯合艦隊司令長官トシテ其ノ上ニ  
 置ケリ然ルニ露京ヲ出發シテ赴任ノ途ニ  
 就ケルスクルイドロフ及ヒバグラーゾ  
 フノ両中將ハ遂ニ旅順口ニ入ルコトヲ得  
 スレテ浦塩斯德ニ滞在シ旅順<sup>口ニ在</sup>艦隊ハ  
 海軍少將ウ井ッテ、ゲリウ、カルロウ井ッテ、ウ井  
 トゲフト臨時司令長官トシテ其ノ指揮ヲ  
 掌シ<sup>リ</sup>敵ノ將校等ハ我カ封鎖艦隊ノ行

0530

動ヲ研究ニ就中水雷敷設艦<sup>アムール艦</sup>及

海軍中佐<sup>フエオドル</sup>、ニコライ<sup>ウ井</sup>、チ<sup>イ</sup>、ワ

ノ<sup>フ</sup>及ヒ乗組將校等ハウ井トゲ<sup>フ</sup>ト司

令長官ノ許可ヲ得テ五月十四日ノ夜半<sup>ノ</sup>

一ウ井トク<sup>ト</sup>掩護<sup>ノ</sup>下<sup>ニ</sup>港外ニ出テ距岸約

十海里ノ處ニ五十乃至百呎ノ間隔ヲ以テ

一海里ノ間ニ機械水雷ヲ沈置セシカ其ノ

計畫奇功ヲ奏シ我カ初瀬ノ爆沈<sup>レ</sup>ハ島ノ

損傷スルヲ見ルヤウ井トゲ<sup>ト</sup>司令長官

ハ機乗スヘシトナレ直ニ驅逐隊ヲ放チ又

黄金山上<sup>ニ</sup>在<sup>ル</sup>將校ハ我ヲ迷ハサンカ<sup>為</sup>

ソ普通ノ無線電信符号ヲ以テ第一<sup>潜水艦</sup>

隊ハ歸<sup>レ</sup>リ第一<sup>潜水艦</sup>水艇隊ハ未<sup>レ</sup>等ノ語ヲ

十七日午後四時

四二四一

發ヒリト云フ爾未同司令長官ハ海上ヨリ、  
 接近セラルル、慮アル方面ハ主トシテ敷  
 設水雷ヲ以テ防禦セルト努メ之カ為メ敷  
 設艦、アムールハ、ノール井ク及ヒ驅逐艦ノ  
 掩護ノ下、屢々出勤セルモノトシ、  
 概ネ我カ驅逐隊、艇隊等、妨ケラレタ  
 ルヲ以テ更ニ小蒸氣船、端舟及ヒビヤン  
 ヲ使用シテ鳩灣等ニ水雷ヲ沈置セリト傳  
 又是ヨリ先キ我カ第一陣ノ塩大澳  
 ニ上陸シ金州ニ向ハントスルヲ察シタル  
 同司令長官ハ或ハ我カ兵ノ一部、ビヤン  
 等ニテ大連灣ヨリ上陸センコトヲ慮リ武  
 装セル小蒸氣船三隻ヲ海岸ノ色ニ擬シテ

0532

十世八代後見

四二六

五

頁

黄色ニ塗抹シ五月二十日大連灣ニ回航セ  
 シメ一面ニハ毎日港口附近掃海行セシカ  
 同二十一日朝驅逐艦マズ又イ出港  
 際ニ浮流水雷ニ罹罹テ大破損ヲ蒙蒙レリ  
 既ニシテ其ノ陸軍ハ金州陣地防禦ノ援助  
 トシテ砲艦ヲ金州灣及ヒ大連灣、派遣セ  
 ンコトヲ要請シラ井トゲフト司令長官ハ  
 砲艦ボイブル及ヒ驅逐艦ボイキイブル  
 又イヲ大連灣、回航セシメ金州灣ニ  
 派遣ス拒絶セリト云フ

(二) ブーブノフ大佐記事ノ大要ニ曰ク五月二  
 日編者曰我ク五月十五日ナリ午前十時各艦祈禱ヲ行ヒシカ之  
 ヲ終リテ後幾クモナク遠ク爆聲ヲ聞クト

0533

同時、艦橋ノ信號兵ハ日本戦艦爆發シ其  
 シク傾斜シツ、アリト絶叫セリ然レトモ  
 距離遠隔セルヲ以テ詳知スル能ハス唯敵  
 艦列ノ混乱セルヲ認ムルノミナリシモ黄  
 金山望樓ハ戦艦富士(實際ハ島ナリ)ノ爆發ヲ確メ  
 タリ次テ吾人ハ午食ノ卓ニ就キタル時  
 復モヤ連続ニ回ノ爆聲ヲ聞キ上甲板ニ在  
 ル兵員ハ<sup>口</sup>ウラ<sup>口</sup>ヲ絶叫シ延テ全艦隊ニ及  
 ンセリ是、日本戦艦一隻爆沈セルヲ以テ  
 ナリ次テ駆逐隊十六隻ハ出港準備ノ余セ  
 ラレ第二駆逐隊ノ八隻ハ日本軍艦ノ北方  
 ニ位置シテ牽制運動ヲ為シ第一駆逐隊ハ  
 若シ敵ノ援隊到達スルハ迂回シテ

0534

廿七八年海戦史

四一八

海

軍

其ノ南方ニ出テ翌日韓國叢島方面ニ出沒  
 敵軍ノ旅順ニ向フモノヲ脅シ四日早朝  
 引還シ第二驅逐隊ハ更ニ出勤シテ之ヲ迎  
 フルコトニ決走セリ予ハストロジエラオ  
 イニ乗シテ第二驅逐隊ヲ率井出港セシカ  
 數分時ニシテ敵軍艦ニ復ノ撞撃ヲ見次テ  
 其ノ艦體ヲモ認ムルニ至リタルヲ以テ全  
 速力ヲ出シ敵ヨリ四十鏈編者曰ク二鏈ハ百  
 八十二米矣ハ當ルノ距離  
 ニ於テ之ト並行ノ針路ヲ取リ第一驅逐隊  
 ハ我ヨリ稍西ニ當リ南ニ航セリ既ニシテ  
 第二驅逐隊ハ敵艦隊ノ正横ニ達セル時  
 其ノ前方ニ當リ急航シ来ル敵艦七隻アリ  
 予等モナク我ニ接近シ總砲火ヲ開キシ

0535

ヲ以テ予ハ到底襲撃ノ無効ナルハキヲ察  
シテ退却シ第一驅逐隊モ亦巡航ノ不得策  
ナルヲ覺リテ引還セリ

第二節 封鎖宣言及ヒ爾後ノ行動

是ヨリ先キ新ニ編制セラレタル第十師團ハ第七

戰隊

角

東洲角ハ鴨緑江ノ西方約四十海里ニシテ北緯約三十九度四十五分  
東經約百二十三度二十五分ニ位シ青堆子灣ノ東側於テ南方ニ突出セシ角ナリ

中間

金州

出

テ

敵

ヲ

以

0536  
0537  
0538

ヲ以テ予ハ到底襲撃ノ無効ナルヘキヲ察  
シテ退却シ第一驅逐隊モ亦巡航ノ不得策  
ナルヲ覺リテ引還セリ

第二節 封鎖宣言及ニ爾後ノ行動

是ヨリ先キ新ニ編制セラレタル第十師團ハ第七  
戰隊掩護ノ下ニ五月十九日既東青島

南尖子東青島  
子角一端ニ在リ

以テ第一、第二兩軍ノ

中間ニ行動セシトシ第二軍ハ二十六日ヲ期シテ

金州城ヲ攻撃シ之ヲ占領セハ直ニ大連灣西岸ニ

出テントスルノ計画ヲ是ノ聯合艦隊ハ之ト相應

シテ敵艦隊ノ遁竄ヲ防キ旅順口ノ封鎖ヲ嚴ニス

ルト同時ニ第二軍残部ノ上陸ヲ掩護シ且一被隊

ヲ以テ同軍ノ攻戦ニ策應セシメ敵ヲ止テ全陸

0536  
0537  
0538



ヲ以テ予ハ到底襲撃ノ無効ナルハキヲ察  
シテ退却レ第一驅逐隊モ亦巡航ノ不得策  
ナルヲ覺リテ引還セリ

第二節 封鎖宣言及ニ爾後ノ行動

是ヨリ先キ新ニ編制セラレタル第十師團ハ第七

戦隊掩護ノ下ニ五月十九日既東

ニ上陸ヲ開始シ以テ第一第二兩軍ノ

中間ニ行動セントシ第二軍ハ二十六日ヲ期シテ

金州城ヲ攻撃シ之ヲ占領セハ直ニ大連灣西岸ニ

出テントスルノ計画ヲ是ノ聯合艦隊ハ之ト相應

シテ敵艦隊ノ道竄ヲ防キ旅順口ノ封鎖ヲ嚴ニス

ルト同時ニ第二軍残部ノ上陸ヲ掩護シ且一被隊

ヲ以テ同軍ノ攻戦ニ策應セシメ敵ヲルテ全然陸

海軍史 第十一号 海軍史 第十一号 海軍史

0536  
0537  
0538

軍 威定

海攻圍ノ裡ニ寔減講シメントセリ然レトモ敵モ  
 亦種々ノ方法ヲ案講暗夜或ハ濃霧ニ乘レ巧ヒジ  
 ヤレク等ヲ利用シ以テ屢封鎖線ヲ破リ加フルニ  
 此等ノ「ジャレク」ハ機械水雷ヲ沈置スルノ虞アリ  
 又ルヲ以テ東郷司令長官ハ大本營ノ命ニ基キ二  
 十六日九ノ封鎖宣言ヲ發布セリ  
 本官ハ帝國政府ノ命ヲ受テ明治三十七年五月  
 二十六日清國或京省關東州南部即チ皮子窩ヨ  
 リ普蘭店ニ至ル一直線以南ノ沿岸ヲ帝國軍艦  
 ノ充分ナル兵力ヲ以テ封鎖シ之ヲ維持スルコ  
 ト兵ニ封鎖ヲ破ラントスル一切ノ船舶ニ對シ  
 國際法及ヒ帝國ト他ノ中立諸國トノ條約ニ於  
 テ許容セラレタル一切ノ強制手段ヲ用フハキ

十一月廿三日

軍 威定

0539

コトヲ茲ニ宣言ス

於帝國軍艦三笠

聯合艦隊司令長官海軍中將東郷平八郎

此ノ日早曉第二軍ハ豫定ノ如ク金州方面ノ攻撃

ヲ開始シ筑紫平遠赤城鳥海及ヒ第一艇隊ハ筑紫

艦長海軍中佐西山保吉指揮ノ下ニ金州灣ニ進シ

陸軍ヲ援ケテ奮闘シ鳥海艦長海軍中佐林三子雄

等之ニ死シ遂ニ目的ヲ達シ我カ第二軍ハ激

戰ノ末同日南山ヲ陥レ次ニ南関嶺ノ陣地ヲ攻略

シ二十八日トテ大連灣一帯ノ陸地全ク我カ占領

ニ歸セリ(第二篇陸軍ト共  
同作戰ノ部ニ詳ナリ)然レトモ同灣ニハ露國ノ敷

設ニ係ル多數ノ沈置水雷アリテ未タ航路ヲ開通

スルニ至ラサルヲ以テ東郷司令長官ハ二十九日

0540

5

片岡第三艦隊司令長官、訓令シテ同灣ノ掃海及  
 ヒ陸上ノ經營ニ任セシム而シテ一面ニハ封鎖宣  
 言ニ基キテ「ジャンク」等ノ拿捕臨檢ヲ勵行シ且港  
 口附近ニ機械水雷ヲ沈置スル等極力敵艦隊ヲ壓  
 迫シ又敵カ南山ノ一敗以來北ハ蓋平附近マテ一  
 兵團ヲ進メテ尚南下セントシ南ハ双臺溝ヲ扼守  
 レ「ジャンク」ヲ利用シテ南北相通  
 知シ艦隊ノ一部ヲシテ渤海灣ニ據ル  
 リ然ルニ敵艦隊モ亦我カ作戰ノ  
 遁竄ヲ謀ルニ急ナルモノ、如ク  
 示レ六月四日薄暮ニハ砲艦二  
 ヒ小蒸氣船三隻旅順口前に現レ  
 第四驅逐隊ハ彼ヲ誘致セント欲

廿七日（日）

據此、蓋平附近、大南灣、定分、真角、  
 等處、敵艦隊、前記、渤海灣、據守、之、事、也、

0541  
0542

隊司令長官、訓令レテ同灣ノ掃海及  
 警ニ任セシム而シテ一面ニハ封鎖宣  
 ジヤンク等ノ拿捕臨檢ヲ勵行シ且港  
 械水雷ヲ沈置スル等極力敵艦隊ヲ壓  
 南山ハ一敗以來北ハ蓋平附近マテ一  
 テ尚南下セントシ南ハ厦門ヲ扼守  
 利用レテ南北相通  
 一部ヲシテ渤海灣  
 艦隊モ亦我カ作戰ノ  
 急ナルモノ、如ク  
 四日薄暮、ハ砲艦ニ  
 三隻旅順口前ニ現レ  
 被ヲ誘致セント欲

據此、同灣、以、同、大、海、受、分、其、南、部、其、北、部、  
 然、レ、モ、本、史、前、記、海、灣、ヲ、總、稱、ス、其、中、之、渤、海、灣、  
 以、下、之、故、也、

0541  
0542

カ

片岡第三艦隊司令長官、訓令シテ同灣ノ掃海及  
 ヒ陸上ノ經營ニ任セシム而シテ一面ニハ封鎖宣  
 言ニ基キテ「ジャック」等ノ拿捕臨檢ヲ勵行シ、  
 口附近ニ機械水雷ヲ沈置スル等極力敵艦隊ヲ壓  
 迫シ又敵カ南山ノ一敗以來北ハ蓋平附近マテ一  
 兵團ヲ進メテ尚南下セントシ南ハ雙臺溝ヲ拒守  
 知シ艦隊ノ一ニテ南北相通信連絡スルヲ察  
 リ然ルニ敵艦隊モ亦我カ作戰ノ進捗ニ伴ヒ自ラ  
 遁竄ヲ謀ルニ急ナルモノ、如ク隨時活動ノ氣勢  
 ヲ示シ六月四日薄暮ニハ砲艦ニ隻驅逐艦四隻及  
 ヒ小蒸氣船三隻旅順口前ニ現レタルヲ以テ我カ  
 第四驅逐隊ハ彼ヲ誘致セント欲シ鮮生角ノ南方

廿七日午時

二三

正

日

0541  
0542

二進 引 嶗嶗嶗砲臺ヨリノ射撃ヲ受ケテ終ニ南

方ニ避ケシカ午後七時四十分ニ至リ城頭山下ニ

大爆烟起リ敵ノ艦船蒼皇トシテ港口ニ遁レ去ル

ヲ見タリ蓋シ其ノ汽船一隻我カ機械水雷ニ觸レ

テ爆沈セルナリ

二隻ノ龍王塘龍王塘ハ旅順口東方約七海里處ニ在リ松嶗南其南東方ニ突出トシ灣ヲ成ス而シテ其西側ニ在リ

ヲ揚ケテ之ニ向ヒ全速突進シテ小平島小平島ハ旅順口南東ニ在リ

リシニ敵ハ西口灣附近ニテ他ノ僚艦ト合シ遂ニ

要塞下ニ遁逸レ次テ十三日午前ニハ五六隻ノ小

蒸氣船城頭山下ニ進ミ蠻子管下ニハギリヤ一ノ

及ヒ驅逐艦五隻現レ午後ニ至リ更ニ饅頭山下ニ

ガレシヤトヤシケ山型砲艦一隻驅逐艦三隻小蒸氣船

一隻敷設艇六隻ヲ認メシモ遂ニ戦ヲ交スルニ至

リ

0543-  
0544  
0545

ケテ終ニ南

城頭山下

ニ道レ去ル

水雷ニ觸レ

0543-2  
0544  
0545

其南東方ニ突出シ湾ヲ形成ス而シテ其西側ニ高サ四  
注ク其附近海面熱歌多ク干出六呎乃至十呎ナリ

島(小平島) 此島又(小平島)ニ呼ビ八期東半島本陸低海岸ト平行ニ横ニ長ク海里餘  
其西側ニ長ク多ク岩半島ニシテ旅順ニ東方約十二海里ニ在リ其中央部ハ低嶺地  
ト合シ遂ニ其海方面ニ陸地ニ接ス而シテ其海方面ニ陸地ニ接ス而シテ其海方面ニ陸地ニ接ス

ト合シ遂ニ

五六隻ノ小

ギリヤー

饅頭山下

隻小蒸氣船

交ルニ至



二進<sup>中</sup>嶗嶗嘴砲臺ヨリノ射撃ヲ受ケテ終ニ南  
 方ニ避ケレカ午後七時四十分ニ至リ城頭山下ニ  
 大爆烟起リ敵ノ艦船蒼皇トシテ港口ニ遁レ去ル  
 ヲ見タリ蓋シ其ノ汽船一隻我カ機械水雷ニ觸レ  
 テ爆沈セルナリ十日午後第二驅逐隊ハ敵驅逐艦  
 方面ニ東進<sup>航</sup>来ルヲ見直ニ戦鬨旗  
 ヲ掲ケテ之ニ向ヒ全速突進シ近ニ到  
 リシニ敵ハ西口灣付<sup>近</sup>合シ遂ニ  
 要塞下ニ進<sup>航</sup>三日午前ニハ五六隻ノ小  
 及ヒ驅逐艦五隻現レ午後ニ至リ更ニ饅頭山下ニ  
 ケレシヤシク山型砲艦一隻驅逐艦三隻小蒸氣船  
 一隻敷設艇六隻ヲ認メシモ遂ニ戦ヲ交<sup>ス</sup>ルニ至

0543-2  
 0544  
 0545

ラス翌十四日モ敵艇五隻午前ヨリ先鐵山頂ノ東  
 方ニ於テ掃海ヲ行ヒ驅逐艦四隻砲艦二隻之ヲ掩  
 護シツ、アリシ午後七隻ノ驅逐艦鮮生角方面  
 ニ現レ陸岸ニ沿ヒテ進行シ、ウ井クモ亦蠻子  
 營下ニ出テ我カ驅逐隊艇隊ヲ見テ驀然掩撃シ未  
 リ我ハ應戦シツ、漸次沖合ニ出テシ  
 シテ急追シ、ウ井クハ帽島ノ東ニ平ト驅逐艦  
 ハ小平島附近マテ突進セシ我カ封鎖戦隊ヲ望  
 見スルニ及ヒ俄ニ轉シテ港口ニ向ヘリ越テ十七  
 日第一第三驅逐隊第十第十四艇隊ハ封鎖任務ニ  
 就キ旅順口ヲ偵察セシ、ウ井ク及ヒ砲艦二  
 隻驅逐艦四隻ハ黄金山ノ東ニ出テ度ニ蠻子營ノ  
 南ニモ驅逐艦四隻及ヒ小蒸氣船六隻ノ游弋スル

十一月八日 駆逐艦

二二

五

四

0546

認メ、午後二時頃、至リ敵ノ驅逐艦三隻、ボ  
 ーブル型砲艦二隻及ヒ、ノールウ井ク等ハ海岸ニ沿  
 ヒテ小平島附近ニ出テ我ハ漸次南方ニ退キ三時  
 五十分過岩附近ニ到リテ笠置高砂ノ二艦ニ會セ  
 リ是ニ於テ各隊増速シテ小平島ニ向ヒシ途上  
 帽島方面ニ當リ砲聲頻ニ聞エ又白煙ノ昇ルアリ  
 乃チ轉シテ用テ南ニ向フノ途次鎮遠松島モ亦南  
 三山島方面ヨリ來會シ相共ニ進航シテ霧霧岸  
 テ罩ノ、遂ニ敵ノ見能ハス僅ニ六時十五分頃  
 ノールウ井ク數隻ノ驅逐艦ヲ伴ヒテ帽島附近ニ在  
 ルヲ望見セ、敵艦ノ數ヲ見テ、  
 當時旅順口内ニ於テ、  
 理ヲ急キ同時ニ掃海ヲ勵行シテ港口ノ航路ヲ開

0547

キ一意封鎖線ヲ脱出セント企テ居ル状アルノ

ミナラス露帝ハ切ト旅順ノ陥落ヲ慮其ノ守將

ステセルニ向ヒ堅城鐵壁希ニ遂ニ救フハカラズ

砲臺及ヒ諸建築物ハ悉ク之ヲ破壊シ軍艦ハ

死カテ盡シテ浦港ニ遁走シ然レトモ到底逸

スル能ハサルニ至リハ寧口之ヲ斷シテ降

服スヘカラスト命ニタリトノ風説筆傳トリ諸報

一トシテ旅順艦隊脱出ノ前兆タラサ

ルモノナク浦塩斯徳ノ敵艦隊モ亦時々邊海ニ出

没シテ遙ニ旅順ノ僚艦隊モ應セントスルモノ

如シ是ニ於テ東郷司令長官(六月六日海軍大將任セラル)ハ益警戒ヲ

嚴ニレ十八日命令ヲ發シテ第一第三第五第六

七戦隊及ヒ驅逐隊艇隊等ニ指示スルニ敵艦脱出

十二(五) 海軍 二 五二五

ニ對スル豫定行動ヲ以テレ一面ニ於テハ陸海聯  
 合作戰ノ計畫ヲ進メ十九日片岡第三艦隊司令長  
 官シ重砲隊ヲ編成シ青泥窪ニ揚陸セシメ以テ陸軍大  
 將男爵乃木希典ノ統率セル第三軍ニ策應セシメハキ  
 命ヲ入同軍ハ專ラ旅順攻圍ノ任ニ當ラントスル  
 モノニシテ五月下旬編成セラレ其ノ司令部ハ既  
 ニ本月四日ヲ以テ塩大澳ニ到着セリ二十日ニ至  
 リ東郷司令長官ハ東郷第三艦隊司令官ニ命スル  
 ニ第六戰隊及ヒ鳥海學治並ニ第三十艇隊ヲ率井  
 二十四日出發シ運送船ヲ掩護シテ旅順海岸ニ到  
 岸シ岸上ニ策應セシメハキヲ以テセシカ未タ其ノ任  
 務ニ就クニ至ラスシテ二十三日拂曉敵ノ驅逐艦  
 木更ハ旅順港外約木海里ニ出テ水雷敷設ニ從

旅順砲台

片岡

0549

事<sup>レ</sup>我<sup>レ</sup>倭<sup>レ</sup>装<sup>レ</sup>砲<sup>レ</sup>艦<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>集<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>時<sup>レ</sup>砲<sup>レ</sup>火<sup>レ</sup>交<sup>レ</sup>撃<sup>レ</sup>  
時<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>敵<sup>レ</sup>艦<sup>レ</sup>隊<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>擧<sup>レ</sup>港<sup>レ</sup>外<sup>レ</sup>ニ<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>動<sup>レ</sup>ス<sup>レ</sup>ル<sup>レ</sup>ニ<sup>レ</sup>至<sup>レ</sup>リ

十二日三時

軍

0550

廿七八金治軍史

0551